琉球語と九州語が共有する分節音における非中央語的特徴

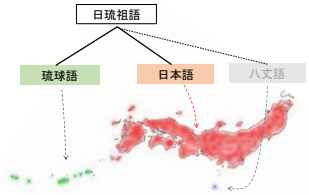
五十嵐陽介
（国立国語研究所）

2020年12月19日

1. はじめに

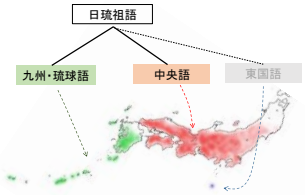
Pellardの系統樹

Pellard（2015）



服部四郎の系統樹

服部（1976a）



九州・琉球祖語仮説

九州の言語の少なくとも一部と琉球列島の言語とからなる単系統群が存在するとする仮説

- 伊波（1911; 1974）
- **服部（服部1976ab）**
- 野原（1979-83）
- 上村（1997）
- 狩俣（2002; 2016; 2018; 2020）
- 風間（2012）
- 五十嵐（2016; 2017a; 2017b; 2018a; 2018b; forthcoming）

九州・琉球祖語仮説を音変化に基づいて提唱したのは服部（1976ab）

目的

- 服部四郎の九州・琉球祖語仮説は母音の音変化に基づいている。
- しかし、服部四郎の提示する証拠は決定的なものではない。

- 本発表の目的
  - 服部四郎の九州・琉球祖語仮説の要点を整理する。
  - 母音に関する少数の証拠を新たに提示する。
  - 九州・琉球祖語仮説を擁護する。

構成

- 2. 九州・琉球語を定義づける音変化
- 3. *əiの音変化
- 4. *e, *oの保持
- 5. 結論

7

2. 九州・琉球語を定義する音変化

8

服部四郎が根拠とする音変化

日琉祖語
*əi
*e
*o

9

服部四郎が根拠とする音変化

日琉祖語		上代中央語		現代中央語
*əi	>	i_2	>	i
*e				
*o				

10

服部四郎が根拠とする音変化

九州・琉球祖語		日琉祖語		上代中央語		現代中央語
*e	<	*əi	>	i_2	>	i
		*e				
		*o				

11

服部四郎が根拠とする音変化

九州・琉球祖語		日琉祖語		上代中央語		現代中央語
*e	<	*əi	>	i_2	>	i
		*e	>	i_1	=	i
		*o				

12

服部四郎が根拠とする音変化

九州・琉球祖語		日琉祖語		上代中央語		現代中央語
*e	<	*əi	>	i_2	>	i
		*e	>	i_1	=	i
		*o				

13

服部四郎が根拠とする音変化

九州・琉球祖語		日琉祖語		上代中央語		現代中央語
*e	<	*əi	>	i_2	>	i
*e	=	*e	>	i_1	=	i
		*o				

14

服部四郎が根拠とする音変化

九州・琉球祖語		日琉祖語		上代中央語		現代中央語
*e	<	*əi	>	i_2	>	i
*e	=	*e	>	i_1	=	i
		*o				

15

服部四郎が根拠とする音変化

九州・琉球祖語		日琉祖語		上代中央語		現代中央語
*e	<	*əi	>	i_2	>	i
*e	=	*e	>	i_1	=	i
		*o	>	u	=	u

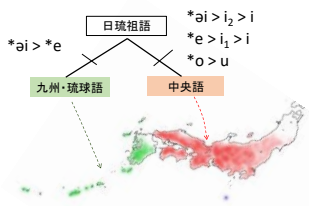
16

服部四郎が根拠とする音変化

九州・琉球祖語		日琉祖語		上代中央語		現代中央語
*e	<	*əi	>	i_2	>	i
*e	=	*e	>	i_1	=	i
*o	=	*o	>	u	=	u

17

九州・琉球語と中央語とを定義する音変化



18

3. *əiの音変化

*əi

上代中央語においてo$_2$と交替するi$_2$

（服部1979; Pellard 2013）

日琉祖語	上代中央語
*əi *kəi「木」 *əkəi「起きる」	i$_2$ ~ o$_2$ ki$_2$「木」~ *ko$_2$-dati「木-立」 oki$_2$-「起き」~ *oko$_2$s-「起こす」

*əi

上代中央語においてo$_2$と交替するi$_2$

（服部1976a; 1978ab; 1979; Frellesvig and Whitman 2004; 2008; Pellard 2008; 2013; 2015; forthcoming; Frellesvig 2010）

日琉祖語	上代中央語
*oi *tukoi「月」 *suNKoi「過ぎる」	i$_2$ ~ u tuki$_2$「月」~ *tuku-jo$_1$「月-夜」 sugi$_2$-「過ぎ」~ *sugus-「過ごす」
*əi *kəi「木」 *əkəi「起きる」	i$_2$ ~ o$_2$ ki$_2$「木」~ *ko$_2$-dati「木-立」 oki$_2$-「起き」~ *oko$_2$s-「起こす」
*ai *sakai「酒」 *aNkai「上げる」	e$_2$ ~ a sake$_2$「酒」~ *saka-duki$_1$「酒-杯」 age$_2$-「上げる」~ *agar-「上がる」

*uiと*oiとを区別する枠組みもあるが本発表では両者をまとめて*oiとして扱う。

*əi

上代中央語においてo$_2$と交替するi$_2$

（服部1976a; 1978ab; 1979; Frellesvig and Whitman 2004; 2008; Pellard 2008; 2013; 2015; forthcoming; Frellesvig 2010）

琉球祖語	日琉祖語	上代中央語	現代中央語
*i	*oi	i$_2$	i
*e	*əi	i$_2$	i
*e	*ai	e$_2$	e

*əi

*əiを含む語

（服部1979; Pellard 2013）

琉球祖語	日琉祖語	上代中央語
*ke「木」 *oke-「起きる」 *ote-「落ちる」 ....etc.	1. *kəi「木」 2. *əkəi-「起きる」 3. *ətəi-「落ちる」 等、一部の上二段動詞語幹	1. *ki$_2$「木」 2. *oki$_2$-「起きる」 3. *oti-「落ちる」 ....etc.

*əi

日琉祖語 *kəi「木」

- 現代九州語に*kəi「木」> *ke の証拠は見つからない。
- ただし8世紀の文献『日本書紀』景行紀:
  九州の地名： mike$_2$「御木」（服部（1976a/ 2018: 64））
  是居於御木（木、此云開）川上（景行紀十二年）
  アサシモノ　ミケノサヲバシ
  到筑紫後國御木[...] 阿佐志毛能　瀰概能佐烏麼志
  マヘツキミ　イワタラスモ　ミケノサヲバシ
  魔弊菟耆瀰　伊和哆羅秀暮　瀰開能佐烏麼志（景行紀十八年）
- しかし8世紀の九州の地名が、九州・琉球祖語の語とは限らない（Pellard 2018）。
- 強固な証拠ではない。

*əi　日琉祖語 動詞語幹末*əi-

- 日琉祖語で語幹末に*əi-を持つ動詞は、一部の九州語でe-を持つ。（服部（1976a/ 2018: 63-64); 服部（1976b/ 2018: 84））
  - 日琉祖語　*akəi-「起きる」:: 九州語 *oke-「起きる」
  - 日琉祖語　*atəi-「落ちる」:: 九州語 *ote-「落ちる」
- 九州東北部に広範に観察されるが（上村1983: 17; Serafim2003）、その痕跡は九州西南部にも見つかる（五十嵐forthcoming）
- しかし、音変化の結果ではない可能性が残る。
- 類推変化による活用パラダイムの合流の可能性がある（Pellard 2018）。
  - 服部四郎は類推変化の可能性を考慮していない。

25

*əi　日琉祖語 動詞語幹末*əi-

琉球祖語		日琉祖語		上代中央語
上一段		*上二段		上二段
*sugi-「過ぎる」	← *oi > *i	*suNkoi-「過ぎる」	→ *oi > *i_2	*$sugi_2$-「過ぎる」
下一段		*中二段 Serafim (2003)		
*oke-「起きる」	← *ai > *e	*akəi-「起きる」	→ *ai > *i_2	*oki_2-「起きる」
		*下二段		下二段
*uke-「受ける」	← *ai > *e	*ukai-「受ける」	→ *ai > *e_2	*uke_2-「受ける」

26

*əi

- 服部仮説を擁護するためには、「*中二段」と「*上二段」が区別される九州語方言を見つけ出す必要がある。
- しかし、先行研究の記述から、九州語における「*中二段」と「*上二段」の区別の有無を知ることは困難である。
  - ほぼすべての先行研究が動詞活用を中央語からの差分の観点から記述しているため、「*中二段」と「*上二段」の違い自体が考慮されることがない。
- 限られた資料に基づく限り、「*中二段」と「*上二段」の区別を明瞭に示す方言は現時点で見つかっていない。

27

*əi

日琉祖語	大分県野津町西神野（糸井1959）
*上二段 *suNkoi-「過ぎる」	下二段 suge-「過ぎる」
*中二段 *akəi-「起きる」	oke-「起きる」
*下二段 *ukai-「受ける」	uke-「受ける」

類推変化によってすべて下二段活用

28

*əi　西神野方言を中央語系統とみなした場合の類推変化

日琉祖語		中央語	類推変化	大分県野津町西神野（糸井1959）
*上二段 *suNkoi-「過ぎる」	*oi > i_2 > i	上二段 *sugi-「過ぎる」		下二段 suge-「過ぎる」
*中二段 *akəi-「起きる」	*ai > i_2 > i	*oki-「起きる」		oke-「起きる」
*下二段 *ukai-「受ける」	*ai > i_2 > i	下二段 *uke-「受ける」		uke-「受ける」

29

*əi　西神野方言を九州・琉球系統とみなした場合の類推変化

日琉祖語		九州・琉球祖語	類推変化	大分県野津町西神野（糸井1959）
*上二段 *suNkoi-「過ぎる」	*oi > *i	上二段 *sugi-「過ぎる」		下二段 suge-「過ぎる」
*中二段 *akəi-「起きる」	*ai > *e	下二段 *oke-「起きる」		oke-「起きる」
*下二段 *ukai-「受ける」	*ai > *e	*uke-「受ける」		uke-「受ける」

30

*əi

- 服部四郎が九州・琉球祖語仮説の証拠として挙げていた九州語の動詞語幹末母音は、類推変化の結果の可能性が高い。
- 証拠にはならない。反証にもならない。
- 九州語の動詞活用のさらなる研究が必要である。

31

*əi

- 「*中二段」を「*下二段」に合流させている九州語諸方言の中には、二種類の二段動詞を持つものがある。
- そのような方言が、日琉祖語の「*中二段」と「*上二段」の区別を保持しているどうかを検討する余地がまだ残っている。

32

*əi

日琉祖語	長崎県壱岐（山口1937）	
*?	上二段	
*?	mukui-「報いる」	唯一の上二段活用
*中二段	下二段	
*əkəi-「起きる」	oke-「起きる」	
*下二段		
*ukai-「受ける」	uke-「受ける」	

33

*əi

日琉祖語		長崎県壱岐（山口1937）
*上二段??		上二段
*mokojoi- (??)「報いる」	*oi > *i →	mukui-「報いる」
*中二段		下二段
*əkəi-「起きる」	*əi > *e →	oke-「起きる」
*下二段		
*ukai-「受ける」	*ai > *e →	uke-「受ける」

34

*əi

日琉祖語	大分方言（山口1937）	
??	上二段	
*?	hotobi-「ふやける」	唯一の上二段活用
*中二段	下二段	
*əkəi-「起きる」	oke-「起きる」	
*下二段		
*ukai-「受ける」	uke-「受ける」	

35

*əi

日琉祖語		大分方言（山口1937）
*上二段??		上二段
*pətə-Npoi- (??)「ふやける」	*oi > *i →	hotobi-「ふやける」
*中二段		下二段
*əkəi-「起きる」	*əi > *e →	oke-「起きる」
*下二段		
*ukai-「受ける」	*ai > *e →	uke-「受ける」

36

4. *e, *oの保持

*e

琉球祖語*e :: 上代中央語$i_{(1)}$

（服部1976a; 1978ab; 1979; Frellesvig and Whitman 2004; 2008; Pellard 2008; 2013; 2015; forthcoming; Frellesvig 2010）

琉球祖語	日琉祖語	上代中央語	現代中央語
*i	*e	i_1	i
*e	*i	i_1	i

*e

*eを含む語

（服部1979; Thorpe 1983; Pellard 2013）

琉球祖語	日琉祖語	上代中央語
*pezi「肘」	1. *peNsi「肘」	pi_1di「肘」
*peru「大蒜」	2. *peru「大蒜」	pi_1ru「大蒜」
*mezu「水」	3. *meNtu「水」	mi_1du「水」
*kezu「傷」	4. *keNtu「傷」	ki_1zu「傷」
*ezu「何れ」	5. *eNtu「何れ」	idu「何れ」
*mememezV「蚯蚓」	6. *mememeNsu「蚯蚓」	(cf. 中古中央語　mimizu「蚯蚓」)
*ero「色」	7. *erə「色」	i_1ro_2「色」
*nego-「濁る」	8. *neNkə-「濁る」	$nigo_2$-「濁る」

*e

*memeNsu「蚯蚓」

日琉祖語	*memeNsu「蚯蚓」	*mina「蜷」	
上代中央語	-	mi_1na	
中古中央語	mimizu	mina	
琉球祖語	*memezV	*mina	
鹿児島県岡児ヶ水	memesu	mina	（橋口2004b）
鹿児島県別府俵積田	memeziro	mina	（橋口2004b）

*o

琉球祖語*o :: 上代中央語u

（服部1976a; 1978ab; 1979; Frellesvig and Whitman 2004; 2008; Pellard 2008; 2013; 2015; forthcoming; Frellesvig 2010）

琉球祖語	日琉祖語	上代中央語	現代中央語
*u	*u	u	u
*o	*o	u	u
*o	*ə	o	o

*o

琉球祖語*o :: 上代中央語u

琉球祖語	日琉祖語	上代中央語
*mogi「麦」	1. *moNki「麦」	$mugi_1$「麦」
*moko「婿」	2. *moko「婿」	$muko_1$「婿」
*omi「海」	3. *omi「海」	umi_1「海」
*kusori「薬」	4. *kusori「薬」	kusuri「薬」
*ori「瓜」	5. *ori「瓜」	uri「瓜」

* さらに動詞連体形語尾*-oが加えられる可能性がある（服部（1976a/2018: 62））

*o　*omi「海」

日琉祖語	*omi「海」	*uma-「旨い」
上代中央語	umi_1	uma-
琉球祖語	*omi	*uma-
長崎県西彼杵郡野母崎町	*omi	mma-

（原田（編）1993）

43

*o　*omi「海」

日琉祖語	*omi「海」	*uma-「馬」
上代中央語	umi_1	uma
琉球祖語	*omi	*uma
鹿児島県種子島中種子	*omi	mma

44

*o　*moko「婿」

日琉祖語	*moko「婿」	*mukaNtV「百足」
上代中央語	$muko_1$	
中古中央語	muko	mukade
琉球祖語	*moko	*mukade
鹿児島県種子島中種子	*moko	mukadʑe

（上村1959）　（植村2001）

45

5. 結論

46

結論

- 服部四郎の九州・琉球祖語仮説は音変化に基づいている。
- しかし音変化に関して服部の提示した証拠は強固なものではない。
- 本研究は服部四郎の九州・琉球祖語仮説の問題点を整理し、それを支持する少数の新たな証拠を提示した。
- データが不足しているため、音変化に関する証拠は十分なものとは言い難い。

47

結論

九州琉球祖語仮説を支持するその他の証拠

- 傍証
  - 語彙の共通性（野原1979-83; 五十嵐2016; 2018a; Jarosz 2019）
  - 文法の共通性（狩俣2012）
- より強固な証拠
  - 語彙における共通改新（五十嵐2016; 2018a; forthcoming）
    - 漢語*douの意味変化（「胴」>「自分自身」）
    - *igiriの意味変化（「穿つこと」>「錐」）と不規則な音脱落（*igiri「錐」>*iri「錐」）

48

結論

- 九州琉球祖語仮説を支持する強固な証拠を提出するためには、さらなる研究が必要。
- そのためには九州語が完全に中央語化する前に、歴史言語学的観点からの方言調査を行うことが必要。

- 本稿は文科省科学研究費補助金基盤研究（B）「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語語方言の祖語の再建および系統樹の構築」（17H02332）の助成を受けています。

引用文献

- Frellesvig, Bjarke (2010) *A History of the Japanese Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Frellesvig, Bjarke and John Whitman (2004) "The Vowels of Proto-Japanese," *Japanese Language and Literature* 38(2), 281–299.
- Frellesvig, Bjarke and John Whitman (2008) "Evidence for seven vowels in proto-Japanese," *Proto-Japanese: Issues and Prospects*, ed. by Bjarke Frellesvig and John Whitman, 15–41, John Benjamin.
- 原田章之進（編）(1993)『長崎県方言辞典』東京: 風間書房.
- 橋口満（2004a)『鹿児島方言大辞典（上）』鹿児島: 高城書房.
- 橋口満（2004b)『鹿児島方言大辞典（下）』鹿児島: 高城書房.
- 服部四郎(1968)「八丈島方言について」『ことばの宇宙』3(11), 92–5.（服部（著）・上野（補注）(2018), 39–43に再録）
- 服部四郎(1976a)「琉球方言と本土方言」『沖縄学の黎明—伊波普猷先生百年記念誌』, 伊波普猷生誕百年記念会（編）, 7–55, 沖縄: 沖縄文化協会.（服部（著）・上野（補注）(2018), 45–81に再掲）.
- 服部四郎(1976b)「日本祖語の母音体系」『朝日新聞』1976年6月22日夕刊（服部（著）・上野（補注）(2018), 83–85に再掲）.

引用文献

- 服部四郎(1978a)「日本祖語について（8）」『月刊言語』7(10), 94-103.（服部（著）・上野（補注）(2018), 170–182に再掲. ）
- 服部四郎(1978b)「日本祖語について（9）」『月刊言語』7(11), 108-117.（服部（著）・上野（補注）(2018), 183–192に再掲. ）
- 服部四郎(1979)「日本祖語について（19）」『月刊言語』8(9), 108-118.（服部（著）・上野（補注）(2018), 305–319に再掲. ）
- 服部四郎（著）・上野善道（補注）(2018)『日本祖語の再建』東京: 岩波書店.
- 五十嵐陽介(2016)「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか？ —「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱—」第3回国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか－日本言語学史の光と影」, 京都: 国際日本文化研究センター.
- 五十嵐陽介(2017a)「九州・琉球同源語調査票」ー橋大学大学院五十嵐陽介ゼミ「終日ゼミ」発表原稿, 東京: 一橋大学.
- 五十嵐陽介(2017b)「共通の改新に基づく分岐学的手法を用いた日本語諸方言の系統分類：南日本語派（琉球を含む）と東日本語派（八丈を含む）の提唱」「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」第1回打ち合わせ・検討会「日本語諸方言の系統関係について」, 東京: 国立国語研究所.

引用文献

- 五十嵐陽介(2018a)「九州語と琉球語からなる「南日本語派」は成立するか？ : 共通改新としての九州・琉球同源語に焦点を置いた系統樹構築」鹿児島大学公開共同シンポジウム「九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動」, 鹿児島: 鹿児島大学.
- 五十嵐陽介(2018b)「分岐学的手法に基づいた日本語・琉球語諸方言の系統分類の試み」シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」, 東京: 国立国語研究所.
- 五十嵐陽介(forthcoming)「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」木部暢子・林由華・衣畑智秀（編）『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』東京: 開拓社.
- 伊波普猷(1911)「琉球人の祖先に就いて」『古琉球』伊波普猷（著）, 1–60, 沖縄: 沖縄公論社.
- 伊波普猷(1974)「琉球語と壱岐方言との比較対照」『伊波普猷全集』第4巻, 233-276, 服部四郎（編）, 東京 : 平凡社.
- Jarosz, Aleksandra (2019) Non-Core Vocabulary Cognates in Ryukyuan and Kyushu, *Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia*, 8 -29.
- 上村孝二(1983)「九州方言の概説」『講座方言学9: 九州地方の方言』1–28, 日野資純・飯豊毅一・佐藤亮一（編）, 東京: 国書刊行会.

引用文献

- 狩俣繁久(2002)「琉球の方言」北原（監）・江端（編）(2002), 161–179.
- 狩俣繁久(2016)「日琉祖語はどのように語られてきたか」国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか－日本言語学史の光と影」第3回共同研究会, 京都: 国際日本文化研究センター.
- 狩俣繁久(2018)「語彙と文法から探る琉球語の南北差と九州からのヒトの移動」鹿児島大学公開共同シンポジウム「九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動」, 鹿児島: 鹿児島大学.
- 狩俣繁久(2020)「琉球語の起源はどのように語られたか－琉球語と九州方言の関係を問う－」. 長田俊樹（編）『日本語「起源」論の歴史と展望: 日本語の起源はどのように論じられてきたか』東京 : 三省堂.
- 風間伸次郎(2012)「琉球諸語研究の視点 —類型的・歴史的観点から—」若手研究者育成セミナー「消滅危機言語としての琉球語研究の意義と目的」, 東京 : 東京外国語大学.
- 三ヶ尻浩(1937)『大分縣方言の研究』
- 野原三義(1979, 1981a, 1981b, 1982, 1983)「琉球方言と九州諸方言との比較」(I, II, III, IV, V)『沖縄国際大学文学部紀要：国文学篇』8(1), 1–16; 9(1-2), 1–20; 10(1), 1–16; 11(1-2), 1–16; 12(2), A1–A14.
- Pellard, Thomas (2008) "Proto-Japonic *e and *o in Eastern Old Japanese," *Cahiers de linguistique Asie Orientale* 37 (2), 133–158.
- Pellard, Thomas (2009) Ogami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryukyu. Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.

引用文献

- Pellard, Thomas (2013) "Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system," *Japanese/Korean Linguistics* 20, ed. by Bjarke Frellesvig and Peter Sells, 81–96, CSLI Publications.
- Pellard, Thomas (2015) "The linguistic archeology of the Ryukyu Island," *Handbook of the Ryukyuan Languages: History, Structure, and Use*, ed. by Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji, 14–37, Berlin: DeGruyter Mouton.
- Pellard, Thomas（2018）「日琉諸語の系統分類と分岐について」シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」, 東京: 国立国語研究所.
- Pellard, Thomas (forthcoming) Ryukyuan and the reconstruction of proto-Japanese-Ryukyuan. *Handbook of Japanese Historical Linguistics*, ed. by Bjarke Frellesvig, Satoshi Kinsui, and John Whitman, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Serafim, Leon A. (2003) "When and from where did the Japonic Language Enter the Ryukyus? –A critical comparison of Language, Archeology, and History," *Perspectives on the Origins of the Japanese Language* 31, 463–476.
- Thorpe, Maner L. (1983) Ryûkyûan language history. Ph.D. thesis, University of Southern California.
- 上村幸雄（1959）「鹿児島県西之表市西之表」国立国語研究所（編）『日本方言の記述的研究』343-364, 東京: 明治書院.
- 上村幸雄（1997）「琉球列島の言語（総説）」『言語学大辞典セレクション: 日本列島の言語』, 311–354, 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）, 東京: 三省堂.
- 植村雄太郎（2001）『種子島方言辞典』東京: 武蔵野書院.
- Vovin, Alexander (2011) "On one more source of Old Japanese i$_2$," *Journal of East Asian Linguist* 20, 219–228.
- 山口麻太郎（1937）『續壱岐島方言集』東京: 春陽堂